

【論文】

『オデュッセイア』における

求婚者たちに対する神々の怒り

——ゼウス・アテネ——

松 本 仁 助

I

われわれは、「オデュッセイア」を読みおわると、悪行を重ねたペネロペイアの求婚者たちが、帰国したオデュッセウスに殺害されたのは、当然だという気持を抱き、彼が妻ペネロペイアと再会できてよかったと思うだろう。

だが、エルプセは、「『オデュッセイア』理解への寄与」⁽¹⁾という論文において求婚者たちの罪について検討しつぎのように疑問を提起しているのである。

オデュッセウスが、ペネロペイアによって提案された弓競技に最初の一矢で勝利を収め（二二、四二〇—四二三）、第二矢で求婚者たちの指導者アンティノオスを射倒すと（二二、八—一二）、求婚者たちは驚愕するが、それを誤射と信じていた。しかしオデュッセウスは、自分の素姓をあかし、おまえらは、俺の家を食いつぶし、力づくで女中たちと寝、そのうえ俺が生きているのに、俺の妻に求婚した。……神々も……人間も顧慮せず、これらすべてのことをなしたのだ（二二、三六一—四〇）⁽³⁾と述べ、このような理由で、求婚者たちすべてを破滅させるのだと宣告する。

求婚者たちはみな恐ろしさのあまり立ちすくんでいたが、エウリュマコスのみは以下のような和解の提案をなした。すなわち彼はまず「あなたがほんとうにイタカのオデュッセウスであって、帰国されたのなら、われわれギリシア人たちが、あなたの館と土地でなした数々の悪行を非難されるのは当然のことだ。しかし、これらすべてに責任のある男アンティノオスはすでに横たわっている。この男が、これらのことを企んだのであり、結婚はそれほど望んでおらず、むしろクロノスの子（ゼウス）が許されなかったこと、つまり彼自らが、よく耕されたイタカの土地の王となり、あなたの息子を待ち伏せして殺そうと謀ったのだ（二二、四五―五三）」と述べ、このあと、だが今や彼（アンティノオス）は罰をうけたのだから、あなたの民人を許してください。われわれは、これから償いとして各人が二〇頭の牛を返しましょう。そのうえ、あなたに和解のために銅と金を贈りましょう（二二、五四―五九⁽⁴⁾）と申し出ている。これは無理のない提案であるように思われる。

しかしオデュッセウスは、個々の求婚者がそれぞれの父祖伝来の全財産以上のものを贈ろうとも、血の復讐からのがれられないのだ。生と死を賭けた戦いがあるのみだ（二二、六一―六七⁽⁵⁾）と、エウリュマコスの提案を拒否するのである。

だがここで、オデュッセウスが不正をなす危険をおかしてはいないかという疑問がおこってくる。われわれが推測し得る限りでは、「オデュッセイア」の求婚者殺害事件が起こっている共同体は、殺人を道徳的に正当なものと見做す条件について、単純だが明白な見解をもっているようである。しかしながら、われわれは、そのような前提が、「オデュッセイア」の詩人によって設定された情況において、実際に存在していたかどうか疑いたい。たしかにオデュッセウスの館は、悲惨な状態にされたが、求婚者である貴族たちは、その罰として死をうけるに値したのだろうか。彼等は、オデュッセウスが遂行するような大量処刑をうけて当然だったのだろうか。

すこし長くなったが、以上のようにエルプセは、オデュッセウスの復讐は正しいのだろうか、言いかえれば求婚者たちの行為は、はたして死にあたいするのだろうかという疑問を提起しているのである。

II

さてエルプセは、自ら提起した以上の疑問にたいして、筋をさかのぼりながら、分析論に反論しつつ、オデュッセウスの復讐の正当性を説明しようとしている。それをここに紹介しよう。

彼は、まずエウマイオスの小屋におけるオデュッセウスとテレマコスの対話（一七、二三三―三三〇）をとりあげ、この場面では、求婚者たちを殺害することがすでに確定していることを指摘している。また女神アテネとオデュッセウスの対話（一三、三七五―四〇三）においてアテネが求婚者たちを罰する（すなわち殺害する）ようオデュッセウスに命じているのは明白であるが、彼等が罰せられねばならない理由は、アテネによって述べられていないと、彼は言っている。そして彼は求婚者たちの罪を明白にするには、アテネの意図を知らなければならぬと見る。⁽⁶⁾

ところでエルプセは、一歌の神々の会議において述べられたアテネの提案、すなわち彼女自身イタカに行き、テレマコスに勇気づけて求婚者たちに彼の思うことを言わせ、そのあと彼を父親の消息を尋ねにピュロスとスパルタに旅立たせ、人々の間で名誉を得させようという提案をとりあげ、これにもとづいてなされたアテネの忠告を検討している。

それによると、まずアテネが(1)テレマコスは、集会で求婚者たちに彼の館を立ち退くよう要求し、ペネロペイアにもし彼女に結婚の意志があるのなら、彼女を実家に帰し、そこで結婚させるがよいと助言している点について、つ

ぎのように説明している。聴衆は、ペネロペイアに結婚する意志がなく、したがって求婚者たちの悪行は続くことを知っている。だが女神の助言は無意味ではない。というのは、テレマコス⁽¹⁾は、公の告発において神々を証人としており（二、二七三）、これによってテレマコスの求婚者たちにたいする態度が決定的に変わったと、エルプセは見做している。ついで（2）テレマコスにペロポネソスに旅立ち、父が生きていると聞けば、もう一年間苦境に耐え、父が死んだと聞けば墓をたて、母親を求婚者の一人に嫁がせよと言っている点に関して、エルプセは、アテネによって奮起させられたテレマコスが、あらゆる妨害にもかかわらず、父の消息を尋ねる努力をする際、ペロポネソスの宮廷においてのみならず、求婚者たちの間においても名声を得ることが、アテネの助言の真の意味であると、彼は言っている。さらにエルプセは、（3）集会と旅のあとで、テレマコスに求婚者たちを除去することを考えよと忠告していることについて、作者はアテネがオレステスをテレマコスの手本にすることにより、名誉を得るように勇気づけると同時に、求婚者たちとアイギストスを同列視しているというふうに見ているのである。つまりエルプセは、アテネの賢明な忠告のあと、彼女が求婚者たちに死刑の判決をくだし、彼等を破滅させる以前に、彼等は神々の意志と対決することになるという見解をとっている。

しかしながらなお彼は、求婚者たちが本当に罪をおかしているのかどうかという疑問を提し、二歌の集会におけるテレマコスとアンティノオスの論争、四歌のイタカにおける求婚者たちの場面、五歌の第二の神々の会議、一三歌におけるアテネとオデュッセウスの対話などを、（時間的な面からも）綿密に検討している。そしてコディノの「復讐⁽²⁾は、最大の不正である（テレマコスの）謀殺が意図される以前にすでに決定されていた」という意見を支持し、アテネは、すでに前から、テレマコスの館を退去するようにという要求を求婚者たちが無視した場合に、求婚者たちにたい

する血の復讐を考えていたと主張するのである。さらにエルプセは、テレマコス殺害の計画は、求婚者たちの不正をより決定的にし、しかもオデュッセウスの館の広間において乞食に変装したオデュッセウスが、求婚者たちから侮辱されるのは、オデュッセウスが彼等の無法を、彼自身が体験することになっていると見ている。また彼は、三歌、四歌のテレマコスの旅についても、一六歌におけるオデュッセウスとテレマコスの再認の場面が可能になるのは、テレマコス物語が存在する故であり、なお両者の運命がうまく一致しているのもこの物語があるためであると言っている。要するにエルプセは、求婚者たちの罪の原点は、館を退去するようにという要求を無視したことにあると見做しているのである。

III

前章においてごく簡単に紹介した統一論者エルプセの求婚者たちの罪にたいする見解は、説得力のあるものと思われる。しかし求婚者たちの罪がはたして、テレマコスの退去要求を拒否したこと（二、八五―一二八）にあるのだろうか。たしかにエルプセは、ゼウスが飛翔させた二羽の鷲に関するハリテルセスの予言（二、一六一―一七六）に耳をかたむけないエウリュマコスの言葉（二、一七八―二〇七）や、粗暴なレオクリトスの言葉（二、二四二―二五六）をとりあげ、求婚者たちが、神の警告を無視した証しとし、このために彼等が罰せられることになったと主張しているのは、それなりに一応納得し得るように思われる。だがはたしてそうだろうか。

まず気がつくことは、アテネがゼウスに告げた提案（一、八一―九五）に従って、メンテスに変身してイタカに行き、テレマコスと話している時、オデュッセウスの館にいる傲慢な求婚者たちについて語っているつぎのような言葉

である。

「さあ信頼して打明けてくれ。何の宴会なのだ。何の集りがなされているのだ。あなたに何か関わりがあるのか。招待宴か、結婚式か。これは持ち寄りの宴会ではない。彼等は傲慢にも館中を食い荒らしているように思われる。わきまえのある男がきて、この数々の恥知らずな行いを見れば、腹を立てることであろう（一、二三六―二三九。）」ああ、あなたが帰国せぬ父をもとめるのも無理はない、彼なら恥知らずな求婚者たちに、手をくだしてくれるだろう……オデュッセウスが求婚者たちと闘えばなあ、彼等はみんなすぐさま倒され、いまわしい結婚をすることになるだろう（一、二五三―二六六）。」

このような言葉は、メンテスⅡアテネのテレマコスへの忠告と二歌の集会における論争以前に述べられたものであるが、この時点ですでに求婚者たちの不正とこれにたいする罰が当然であることをしめしていると言えるだろう。したがって、求婚者たちがテレマコスの退去要求を拒否したことに罪の原点があるとするエルプセの主張は、不十分であると言わざるを得ない。というのは、上にあげた言葉から、アテネは、求婚者たちが集会以前に不正をおかしており、オデュッセウスに皆殺しにされるべきであると、つまりオデュッセウスの大量殺戮を正当と見なしているようだからである。

では、どうしてアテネは、すでに集会以前に求婚者たちが不正をおかしているのだろうか。アテネが、オデュッセウスに好意を寄せていることは、神々の会議における彼女の言葉（一、四五―六二）から明らかであり、したがって彼女がオデュッセウス一家にも気をかけ、援助しようとするのは自然の成り行きであろう。事実イタカのおデュッセウスの館に着いたメンテスⅡアテネは、そこで「傲慢な求婚者たちが、彼等の殺した牛の皮に坐って、戸の前で

将棋を楽しみ、従者やこまめに動く召使たちが、ある者は酒を水で割り、ある者は孔の多い海綿で卓をふいて求婚者の前に置き、またある者は多くの肉を切っていた（一、一〇一―一二二）様子を見ると、彼女は、さきに述べたように、テレマコスとの対話の合間に、このような求婚者たちの行為を「恥知らずな行い（一、二三九）」と言い、オデュッセウスによって、「彼等はみなただちに倒される（一、二六六）」不正な者たちと見て、彼女の計画（二、八八―九二）通り、テレマコスを勇気づけようとしているのである。

ところが、テレマコスはアテネに、「彼女（ペネロペイア）は、いむべき結婚を拒否もせず結末をつけることも出来ずにいる。だがこれらの者（求婚者）たちは、その間にわたしの家を食いつぶし、やがてわたし自身をも破滅させてしまうだろう（一、二四九―二五二）」と、求婚者の不正の原因が彼の母ペネロペイアにあるかのように述べている。一方、アテネの忠告にしたがい集会においてテレマコスにより見事な弁舌で述べられた館からの退去要求にたいして、求婚者アンティノオスがなした拒否回答には、求婚者たちの立場から見て彼等なりの理由があるようにも思えるのである。アンティノオスは館の荒れる責任は求婚者にあるのではなく、ペネロペイアにあるのだと主張して、その根拠をつぎのように述べている。

「彼女（ペネロペイア）がギリシア人（求婚者たち）の心をあざむいてからすでに三年がすぎ、まもなく四年目がやってくるだろう。彼女はみんなに希望を抱かせ、使者を送って各人に約束しながら、内心は別のことを思っていたのだ。彼女は、つぎのような策略を考えだしたのだ。つまり広間に大きな織機を備えて、細糸で大きな布を織りはじめ、ただちにわれわれに言った。『わたしの若い求婚者のかたがた。神の如きオデュッセウスは、亡くなったのですから、わたしとの結婚を急いでおられようとも、わたしが布を織り終ってしまうまで待ってください。ひどい悲

しみをもたらす死の憎むべき運命が（オデュッセウスの父）英雄ラエルテスをとらえた時、彼のための棺掛としてこの布が無駄にならないように。多くの財を得た彼が、棺掛なしに寝かされて、当地のギリシアの女たちがわたしを非難することのないように』と。そこでわれわれの頑固な心も従った。すると彼女は昼間は大きな布を織るが、夜は明りを置いて布をまた解いていた。こうして彼女は、三年の間この策略を見破られず、ギリシア人を信じこませていた。だが季節が廻って四年目がちかづいた時、ついにこの秘密をよく知っている女たちの一人が告げたので、われわれは彼女が立派な布をほどこしているところをおさえた。そこで心ならずも彼女は、やむなく布を仕上げたのだ。お前（テレコマス）自身がわかり、すべてのギリシア人も知るように、つぎのことを求婚者たちは、お前への返答とするのだ。お前の母を家から出し、彼女の父がすすめ、彼女自身にも気に入る男と結婚するようにさせよ。だが、アテネが与えた技と才能と計略をもって、彼女がなお長くギリシア人の息子たちをだまして見よ。……神々が彼女の心に与えたこの考えに固執する限り、求婚者たちは、お前の財産を消尽するだろう（二、八九―一二六）。」

かなり長い引用であるが、これを要約すると、(1)ペネロペイアがひそかに求婚者各人に約束して希望をもたせ、しかも織物を口実にして三年も求婚者たちをだまし、ついに織った布をほどこしている現場を彼等におさえられ、やむなく織物を仕上げた。(2)そこで求婚者たちは、テレマコスにペネロペイアを実家に帰し、彼女の父と彼女に気に入った男と結婚させよと言い、さもなければ彼の財産を消尽しつづけると強迫しているということにしばらくすることができよう。そしてこの要約から、(2)の求婚者たちの強引な要求も、(1)におけるペネロペイアの計略のためになされたと言える。したがって彼等の乱暴な行為にも、アンティノオスの主張を見る限り、それなりの妥当な理由があると見做し得るだろう。⁽⁸⁾

IV

したがってエルプセも、求婚者たちにも彼等なりの理由があると見做している。そして彼は、織物の計略以前に述べているアンティノオスの「彼女がギリシア人の心をあざむいてから三年がすぎ、まもなく四年目がやってくるだろう（二、八八九―九〇）」という言葉と織物の計略以後の「こうして彼女は三年間はこの策略は見破られず、季節が廻って四年目がちかづいた時（二、一〇六一―一〇七）」という言葉には、時間的矛盾はなく、それ故ペネロペイアの策略が発見された時と、集会が開かれた時とは、時間的にあまりはなれていなかったという結論を出し、分析論者キルヒホフ、ベーテ、フォッケらが二、八九―九〇と二、一〇六一―一〇七とが矛盾しているという主張に反論している。⁽⁹⁾

筆者も、このエルプセの結論を支持すると同時に、多数の求婚者たちが食得る家畜の数と日数を割り出し、オデュッセウスの蓄えている家畜が求婚者たちによる長期間の宴会に耐えるものでないとする綿密な傍証にも同意するものである。また、この結論をもとにして、彼は、求婚者たちは、三年来ペネロペイアに求婚してきているが、その求婚は、彼女の策略が発見されるまでは、慣例にかなったものであり、すくなくとも死に値するものではなかったと見做している。そして彼は、求婚者たちがペネロペイアの策略を見破ってから横暴な行動をし、しかもテレマコスのご要求を彼等が拒否した後、彼等は罰を受けるに値するようになったと見ている。

だが、はたしてエルプセの以上のような見方が成り立つのだろうか。というのは、イタカに着いたオデュッセウスに、アテネが、彼の館の状況を、「彼等（求婚者たち）は、すでに三年間広間にのさばり、神の如き奥方に求婚し、結婚の贈物をしているのだ。だが彼女は、いつもあなたの帰国を悲しみながら待ち、彼等すべてに希望を抱かせ、使者を送って各人に約束し、内心は別のことを考えていた（一三、三七七―三八二）」と説明しているからである。このア

テネの言葉によると、エルプセが、求婚者たちは、ペネロペイアの策略を見破り、テレマコスの退去要求を拒否してから、罰をうけるべき行動をとるようになったと見做しているのは、認めがたい。アテネの言葉は、ペネロペイアの策略を見破る以前の行動も、それ以後の行動も同様に罰せられるべきだとしているように思われる。

ではアテネは、どうして求婚者たちの行動を一貫して罰せられるべきものと見做しているのだろうか。この疑問にたいする答えは、やはり「オデュッセイア」のなかにもとめざるを得ない。ところで求婚者たちのペネロペイアにたいする求婚について、イタカに着いたオデュッセウスに、エウマイオスが、「彼等（求婚者たち）は正しく求婚しようとしていない（二四、九〇―九二）」と述べている。したがって求婚者たちは、正当な手続を経て求婚していないということになる。では正当な求婚の手続とは、どういう手続であろうか。スパルタに滞在しているテレマコスに、アテネが、「すでに彼女（ペネロペイア）の父や兄弟たちが、すべての求婚者たちよりも多くの贈物をし、結納の額でもまざっているエウリュマコスと結婚するようにと圧力をかけている。またあなたの意向を無視して、家からあなたの財産が彼女によって持ち出されはしないかと思われる（一五、一六一―一九）」と言って、早急に帰国するように促している。また乞食に変装したオデュッセウスに、ペネロペイアが自分の苦境を打ち明ける際に、彼女が織物の策略を見破られてからは、再婚をのがれることができず、「自分の両親も結婚するように熱心にすすめるし、息子も彼の財産が消尽されるのを知るようになり、怒っている（一九、一五八―一六〇）」¹⁰と述べている。

以上のアテネやペネロペイアの言葉から、実家の両親や兄弟の賛意がペネロペイアの結婚の大きな要素であることがわかる。しかしそれは、あくまで結婚の条件における一つの要素であって、すべてではない。しかもこのことが述べられている時期は、ペネロペイアの策略が見破られ、集会におけるテレマコスの提案が拒否されたあとである。そ

れ故、たとえ実家に結婚を申し込んでいようと、他方でペネロペイアに不当な圧力をかけているなら、求婚者たちは、すでに不正をおかしていると言わねばならないだろう。

では、求婚者たちは、本来どのような手続をとって結婚を申し込むべきだったのだろうか。この点に関しても、われわれは、やはり「オデュッセイア」に手がかりをもとめる以外に手段はない。集会において、テレマコスが求婚者たちを非難した際に彼はつぎのように述べている。「彼等（求婚者たち）は、彼女（ペネロペイア）の父イカリオス自身の氣に入り、彼の欲する者に嫁入り支度をして娘を与えてくれるよう彼の家へ行くことを避けている（二、五二―五四）。」つまり、まっさきにペネロペイアの実家の父に彼女との結婚を申し込むのが正当な手続である。それ故、アテネやペネロペイアが述べているように、ペネロペイアやテレマコスに圧力をかけてから彼女の父に結婚を申し込んでいるのでは、求婚者たちは、正当な手続をふんでいると言えないだろう。

ところで、かりに求婚者たちが正当な手続をふんでさえいれば、ペネロペイアは、彼等の一人と結婚しなければならなかったのだろうか。一五、一六―一九、一九、一五八―一六〇におけるアテネやペネロペイアの言葉を見ると、正当な手続でなくとも実家の意向や息子の氣持が、ペネロペイアの結婚を左右しそうである。しかしペネロペイアには、「いやがるわたしに求婚し（一九、二三三）」と言っているように、もともと再婚の意志はなかったのである。それが織物の策略を見破られたために、求婚者たちから結婚をのがれることができなくなり、さらに実家のすすめや、家財を消尽されている息子の非難の故に、彼女の進退はきわまってしまったのである。ということは、もしこれで彼女が結婚するとすれば、彼女は自分の意志に反し、¹¹周囲の圧力に屈して再婚することになり、その再婚は、不自然で不幸な結婚と言わざるを得ないだろう。

では、ペネロペイアの場合、自然で幸福な結婚、すなわちあくまで正当な再婚というのは、いかなる手続がふま
れ、どのような条件が整うと成り立つのであろうか。この点に関しても、「オデュッセイア」以外には手がかりはも
とめられない。女神アテネは、一歌のテレマコスにたいする忠告において、「もし彼女（母親Ⅱペネロペイア）に嫁ぐ
気持があれば、母親を強大な勢力を有する彼女の父の館に返せ。そうすれば、彼等（実家の人たち）は結婚の宴をも
うけ愛する娘に持たせてやるにふさわしい多くの物を用意するだろう（一、二七五―二七八）」と述べている。この箇所
で、とくにわれわれの注意を引く点は、ペネロペイアに再婚する意志があれば、テレマコスが彼女を実家に返すとい
うことである。それ故「オデュッセイア」では、母親の正当で幸福な再婚とは、一、二七五―二七八とさきにあげた
二、一一四―一一五、二、一五〇―一五四から、つぎのようにまとめうるだろう。

すなわち(a)母親に再婚の意志があり、(b)同時に息子も再婚に賛意をしめして母親を実家に返すという前提が一方に
あり、(c)求婚者たちは、そこでまず実家のほうに結婚を申し込み、(d)実家の者たちが相手を選び、母親にも気に入
た者と結婚するというのが正当な手続をふんだ無理のない幸福な再婚と言えるだろう。

V

ところが、実際には、「オデュッセイア」では、前章に述べたように、求婚者たちは、ペネロペイアの父イカリオ
スに結婚を申し込む以前に、ペネロペイアに再婚の意志がないのに厚顔にも直接彼女に結婚を申し込み、織物の策略
を見破ってからは、館の財産を消尽して、彼女にむりやり結婚を迫り、息子のテレマコスには母親を実家に返すよう
要求しているのである。しかもこのような無法な行動にでた後に、彼女の実家に贈物をして、彼女との再婚をもとめ

ている。このように見てくると、前章のはじめにあげたエルプセの意見、すなわち求婚者たちの求婚が、織物の策略を見破るまでは慣例にかなったものであったという見解も、正しいとは言えないだろう。事実、求婚者たちは、テレマコスが指摘しているように、ペネロペイアの実家に申し込まずに、彼女の意志を無視して再婚をせまったのである。したがって前章末尾にあげた再婚に関する手続のうち、(c)を通じて(a)(b)をたしかめるという手続をふみにじって不正をおかしていることはあきらかであろう。それ故、アテネが、求婚者たちの行動を終始不当であると見なしているのも理由のないことではないと言えるだろう。

しかし正式の手続をふんでいないという理由のみで、アテネがはじめから求婚者たちを死の罰をうけるべき者と見做したのであろうか。そうだとすれば、彼等の罪と罰はあまりにもアンバランスであるように思える。ではアテネが彼等によりはげしく怒る原因が他にあるのだろうか。

この点に関しては、二歌の集会において、テレマコスがアンティノオスに、「私の父が、何処で生きているか、死んでいるかわからないのに、私を生み、育ててくれた女の方を、彼女の意志に反して家から出すことはできない(二、一三〇—一三三)」と反論している言葉、またさきに引用したアテネの、求婚者たちは、三年間も広間にのさばってペネロペイアに求婚しているが、彼女は終始彼の帰国を待ち、彼等すべてに結婚の希望を抱かせながら、内心は別のことを考えていた(二三、三七七—三八二)とオデュッセウスに語っている言葉、さらにペネロペイア自身が乞食に変装したオデュッセウスに「みんな(イタカおよび近隣の諸島の貴族たち)が、いやがるわたしに求婚し、館の財産を食いつぶしている(一九、一三三)」と述べ、このために彼女は客や物乞いの人や布告使に気をくばれず、ただオデュッセウスに恋いこがれ、自分の心をすりへらしていたが、「或る神(一九、一三八)」が自分の心に織物の計略を思い

つかせ、三年間彼等をだまして結婚をのばしてきたが、この計略も見破られ、いまは他の計略も思いつかず、結婚をのがれることができないと言っている（一九、一三九—一五八）言葉を見ると、ペネロペイアと求婚者の関係および求婚の実態はつぎのように要約しうるだろう。

すなわち（イ）オデュッセウスの生死が不明であるのに、求婚者たちが彼の妻ペネロペイアに求婚していること、したがって（ロ）ペネロペイアは、オデュッセウスの帰国を待ち、彼等の求婚をいやがっている一方、（ハ）アテネの忠告のあと、息子のテレマコスは、母親の意志を尊重している（もちろん母親のほうは、このような息子の気持の変化を知っていない）こと、さらに（ニ）「或る神」が織物の計略をペネロペイアに思いつかせ、求婚者たちをだましていたと言っていることである。

また以上の要約から、ペネロペイアが、内心において、求婚者たちの申し込みを拒否しようとしたのは、愛する夫オデュッセウスの生死が、わからなかったためであり、表面で彼女が、彼等をだましたのは、或る神すなわちアテネが策をさずけたからだと言うことがわかるだろう。

このように見てくると、求婚者たちの不法行為の原点は、オデュッセウスの生死がまだ不明であり、ペネロペイアが彼の帰国を心待ちにしているのに、彼等は彼女の実家に申し込むという正式な手続もふまずに、直接彼女に求婚し、館で我が物顔に振舞ったということにあると言える。この点、後に帰国したオデュッセウスが求婚者たちに「わたし（オデュッセウス）が生きているのに、おまえ（求婚者）たちは妻に求婚した（二二、三八）」と言って怒っているとおりである。したがってオデュッセウス一家に好意を寄せているアテネは、ペネロペイアに直接再婚を求めた、時点で、求婚者たちをすでに無法な者と見なし、ペネロペイアを助けて、織物の計略を授け、彼女を苦境から一時まぬ

がれさせたのであろう。それ故、求婚者たちの罪はやはり死に値するのであり、オデュッセウスに求婚者たちを罰するよう命じる（一三、三七六）のは、アテネにとっては、はじめから当然のことであり、不自然なことではないと主張し得る。でなければ、エルプセのように、二歌において、アンティノオスが、彼等によるオデュッセウスの館の荒廃の責任を、ペネロペイアの策略に転嫁している（二八五―二八八）のも、道理のあることとして是認せざるを得なくなるだろう。

VI

だが、ここでさらに疑問が生じてくる。それは、なぜアテネが、ペネロペイアに即座に求婚を拒否させずに一時のがれと思われる計略を授けたのかということである。

しかし、ここでペネロペイアが求婚をただちに拒否しても、求婚者たちは、オデュッセウスを「死んでしまった（二、一八三）」と信じているのであり、「テレマコスなどは言うにおよばず、恐ろしい者は誰もいない（二、一九九―二〇〇）」という彼等は、ただちにあらゆる手段で無法にもペネロペイアとの結婚を実現しようとしたであろう（二、二〇五―二〇七）。しかも彼等のうちには、アンティノオスのように、彼女との結婚より、むしろイタカの王位をねらっている（一、三八六―三八七、二三、四八―五三）者もいた故、その者は、さらに王位奪取の行動に出たであろうと見てよいだろう。このような危険をアテネは、ペネロペイアにさせさせたと思われる。そしてアテネは、ペネロペイアに織物の計略を授け、時間をかせがせたのである。ところでこの女神の計略の意図はどこにあったのだろうか。

一三歌において、オデュッセウスに、「わたし（アテネ）は、あなたが部下たちすべてを失って帰国することをよ

く知っており、そのことをけっして疑わなかった（二三、三三九―四〇〇）とアテネが、彼の運命について述べている。⁽¹³⁾つまりアテネは、この計略がうまくいっている間に、「彼（オデュッセウス）がイタカへ帰国すると定めた年が廻って（二、一六―一八）」くるのを期待し、オデュッセウスが帰れば、賢明な彼が、自分で求婚者たちに対処し、彼等を罰して事件を解決すると思っていたわけである。

しかし、ことはアテネの思惑どおりに運ばなかった。Ⅲ章でふれたように、ペネロペイアの織物の計略を「知っている一人の女が（求婚者たちに）告げた（二、二〇八）」ので、求婚者たちは、その現場をおさえ、オデュッセウスの館に入りびたり、財産を消尽して彼女との再婚に圧力をかけ、テレマコスに「彼等（求婚者たち）は、わたくしの家を食べつぶし、やがてわたしまで破滅させてしまおうだろう（二、二五〇―二五二）」⁽¹⁴⁾といわせる情況になった。一方オデュッセウスのほうも、長年カリュプソの島にひきとめられ、「せめて故郷の煙が立ちのぼるのを見たいと思い、死にたいと願っている（二、五七―五九）」のである。オデュッセウスとその一家に好意を寄せているアテネには、どちらのことにしても静観しておれない事態である。そこでアテネは、一歌の神々の会議において、オデュッセウスを帰国させることと、自分がイタカへ行き、テレマコスを勇気づけることを提案し（二八一―九五）、実行にうつすことになるのである。⁽¹⁵⁾

ところで第一の神々の冒頭で、ゼウスは人間は、自分の愚かきの故に、自己の分を越えた苦勞をしている。アイギストスも分をわきまえずにアガメムノンの妻と通じ、帰国したアガメムノンを殺害した。それも後にオレステスによって復讐されるから、クリュタイムネストラに言い寄ってはならないという警告をうけているのにその警告を聞かずに罰をうけたと言っている（二、三三―四三）。このゼウスの嘆きにたいして、さきにふれたように、アテネは、

オデュッセウスの郷愁を述べ、ゼウスに会議でオデュッセウスの帰国をはかるよう仕向け、ヘルメスを遣わして、神々の会議におけるオデュッセウスの帰国の決議をカリュプソにつたえさせ、自分はイタカへ向かうことにする（一、四五―九五）。以上の場面を見ると、アイギストスの事件を嘆くゼウスの言葉と、オデュッセウスの帰国およびテレマコスの勇気づけを提案するアテネの言動には、一見何の関係もなさそうである。

だが、すでに述べてきたように、イタカでは、イタカおよび近隣の諸島の貴族の息子らが、正当な手続をふまず無法にも直接ペネロペイアに求婚しているのである。それもオデュッセウスの生死が不明であるのに（二、一三二）、いや神々にはオデュッセウスが生きていることは明白である（一、四五―六二）にもかかわらず、彼等は彼女を獲得しようとしているのである。そこでアテネは、ペネロペイアに計略を授けるが⁽¹⁶⁾それもついに見破られ、彼女は苦境におちいつている。このような事情を知れば、アイギストスと求婚者たちとの間に共通性があると思えないだろうか。

すなわち、(1)アイギストスは、クリュタイムネストラにアガ멤ノンという夫がいるにもかかわらず、彼女に言い寄ったが、求婚者たちも、たとえ人間たちには消息不明でもペネロペイアにオデュッセウスという夫がいるのに、彼女に求婚しているということ、また(2)アイギストスが、ゼウスの警告をうけているにもかかわらず、それを無視してクリュタイムネストラと密通したが、求婚者たちも、織物の策略を見破ったとき、アンティノオスが、その策略をアテネがペネロペイアに授けたものと言いながら（二、一一六）、彼女を苦境においやる態度をとると、他の者たちも彼に同調しているのである。いわば彼等はアテネの警告を無視していると見てよいだろう。したがってアイギストスも求婚者たちも、不法な結婚をもとめ、神の警告を無視しているという点で神の怒りをかい、罰をうけるという共通の素地を持っており無関係ではないと見做し得る。つまりアイギストスも求婚者たちも自分たちの愚かさ (atasthai) の

故に、破滅することになったと言える⁽¹⁷⁾。しかもアイギストスに手を下したのは、アガ멤ノンの息子オレステスであり、求婚者たちを罰するであろう者は、アテネの提言からオデュッセウスであり、テレマコスが彼に協力するのだろうと推測し得る。このように見てくると、神々の会議はアイギストスと求婚者たちの罪の共通性をしめし得るのみならず、「オデュッセイア」全体の事件の大筋をすでに聴衆に示唆していると言えるだろう。

ところで五歌の第二の神々の会議において、アテネがゼウスにイタカにおける集会の失敗と、求婚者たちのテレマコス殺害計画を告げた(五、七一二〇)とき、ゼウスが「オデュッセウスが帰国して彼等(求婚者たち)を罰する」という提案は、お前(アテネ)自身がなしたのではないか(五、二三―二四)」と言っているのも、アテネの忠告および、それによるイタカの集会以前に、第一の神々の会議において、アテネがオデュッセウスを帰国させるよう提案した際に、ゼウスと他の神々が、オデュッセウスによる求婚者たちにたいする徴罰に同意し、それを会議で決定していたと見るべきであり、またすでにそのような決定が下されていたのも、これまで述べてきたような理由から不当なことは言えないだろう。さらにアテネが、その忠告の終りですでに、テレマコスにたいして、アイギストスを殺害したオレステスのように誉れを得よと勇気づけているのも不自然なことではなからう。

したがって、このように見てくれば、エルプセが、求婚者たちは、集会においてテレマコスの退去要求を拒否する以前、いやペネロペイアの策略を見破るまでは、慣例にのっとった求婚をしていたという主張をしているのは、やはり認めがたいことであろう。

では、神々の怒りをうけるに十分な不法な行為をなしている求婚者たちの集会における行動は、神々の怒りとの関係においてどのように見るべきだろうか。

VII

テレマコスが、アテネの忠告に従い、見事な弁舌で正式な求婚の手續をせず、館の財産を消尽している無法な求婚者たちに、神々の怒りをおそれて館から退去するようもとめると、アンティノオスは、アテネに授けられた織物の策略で彼等をだましたペネロペイアに罪をかぶせ、テレマコスが彼女を実家に帰し、彼女が実家から彼等の一人と結婚するまで館の財産を消尽するという手段をとりつづけると主張する。

だがテレマコスが、これを拒否し、彼等が無法な行動をつづけるならば、ゼウスに許しを求め、彼等を殺害するだろうと言う（二、一四三―一四五）。するとゼウスは「破滅の目差（二、一五二）」をもった二羽の鷲を彼等の頭上に飛翔させた。これを見た予言者ハリテルセスは、求婚者たちにたいして、オデュッセウスはすべての部下を失って二十年目に帰ってくるだろうと予言したが、それが成就されるだろう（二、一七四―一七六）と述べる。

これにたいしてエウリュマコスは、鷲の飛翔による罰の前兆を無視し、オデュッセウスは死んだのだと言ってハリテルセスの予言を否定したうえ、テレマコスをそのかすと罰金を科すと言っておどかし、テレマコスが母親を実家に帰して彼等の一人と再婚させるまで館の財産を消尽すると強迫する（二、一七六―二〇七）。

そこで、テレマコスは、求婚者たちにたいして、「すでに神々とすべてのギリシア人が知っているから（二、二一一）」館の退去をたのまないが、父の消息を尋ねにピュロスとスパルタに行く故、船と水夫を与えてほしいと申し出る（二、二〇九―二二三）。するとオデュッセウスの友メントルが立ちあがって、求婚者たちよりも、テレマコスの言葉を聞いても、父親のようであった王オデュッセウスのことを思いおこして求婚者たちを難詰しないイタカの人々を

むしろ非難する（二、二二九―二四〇）。

このメントルにたいして求婚者の一人レオクリトスが、自分たちの館での行動をやめさせることはできない。たとえオデュッセウスが帰ってきて、自分たちと闘えば殺害されるだろう。またテレマコスも父親の消息を尋ねに船出することはできないようだ（二二四―二五六）と述べ、オデュッセウスでも自分たちの力にはかなわないのだと、彼等の力を誇示し、テレマコスの頼みも拒否してしまう。

こうして集会は解散され、テレマコスは一人さびしく海辺に行き、アテネに祈り、求婚者たちのために旅立ちがでない（二、二六二―二六六）ことを告げる。そこでメントルに変身したアテネが、テレマコスに船出のための助言と指示を与える（二、二七〇―二九〇）。この指示にしたがって、テレマコスは、ピュロスとスパルタへと旅立つことになる。

以上のように求婚者たちは、神々とギリシア人を証人としたテレマコスの退去要求を拒否したのみならず、ゼウスの警告と予言者ハリテリセスの言葉に耳を借さず、オデュッセウスの恩義を思わぬイタカ人を叱責するメントルを侮辱し、テレマコスの依頼した船と水夫の貸与さえ拒んでいるのである。つまり彼等は、神々の怒りの警告や予言者の言葉を無視し、人間の道義に配慮しない愚かで傲慢な態度をとり、いかにもこの時点で、彼等は、はじめて罰をうける原因をつくったと思えるようである。

しかしこれまで何度も指摘したように、このような愚かな求婚者たちの態度は、この集会以前、いや彼等がペネロペイアに再婚を申し込んだ時からすでに認められているところであり、彼等がペネロペイアの策略を見破ったときに、彼女をアテネが助けていることをさと、自分たちの行動をあらためるべきであったのである。だが間違った道

を歩みはじめた彼等は、反省するどころか、かえって館の財産を消尽することにより、彼女に再婚を承諾させようとしたのである。しかも彼等は、集会においても、自分らの欲望に固執してテレマコス⁽¹⁸⁾の要求を拒否したうえ、ゼウスの警告や予言者の言葉をも無視してあくまで無法な圧力によって再婚をせまり、集会を力で解散させている。

したがって集会における求婚者たちは、最初から不当な方法で求婚して、すでにゼウスとアテネの怒りがかつていると見做されるのに、ここでさらに愚かで無法な行動をした故、彼等が罰をうけるのは当然のことだと言うことが、より明白になったのだと言えるだろう。そして求婚者たちが、テレマコスに反論し、ペネロペイアの策略に、自分たちの悪業の責任を転嫁しているのは、まことに手前勝手な理屈にもとづいたものであり、集会の席にいる人たちを納得させようようなものではないと言える。

VIII

このように見てくると、集会における求婚者たち、とくにテレマコスの神々を恐れて館を退去すべきだという要求にたいするアンティノオスの反論にたいして、テレマコスが、母親を意志に反して家から出すことはできない。もしそうすればイカリオスにたいへんな償いをしなければならず、また母は復讐の女神をくだし、人々にも責められるだろう。だから館の財産を消尽するつもりならするがよい。だが「わたし(テレマコス)は、ゼウスが復讐を遂行できるようにしてくださるよう、永遠の神々に呼びかけるだろう。そうすれば館でおまえたち(求婚者たち)を報いをうけずに殺害できるだろう(二、一四三―一四五)」と言うと、ゼウスが、鷲の警告をし、ハリテルセスが、オデュッセウスの帰国はたしかであり、求婚者たちには大きな災厄が近づいていると予言する(二、一四六―一七六)ようになって

いるのも、自然な筋の展開と言えるだろう。しかも違法な道を歩みはじめた求婚者たちには、神の警告である予兆を無視し予言者の言葉にも、耳をかたむけようとしなかったのである。そのうえ彼等は、テレマコスの船出の依頼を拒否し、傲慢にもオデュッセウスを殺害できると言い、集会を解散させてしまうのである。

要するに求婚者たちには、すでに神々の罰をうける軌道が敷かれ、その上を彼等はひた走りに走っていったのである。したがってテレマコスが、アテネの助力でピュロスとスパルタに旅立ったあと、これに気づいた求婚者たちが、待伏せして彼を殺害しようとした（四、六三六―六七四）ことや、乞食に変装したオデュッセウスにたいする彼等の侮辱もその延長上における無法な行動と見做してよいだろう。

それ故、I章にあげたエウリュマコスの提案、すなわちすべての責めを負うべきアンティノオスは死んだのだから、あなたの民人を許してください。われわれはこれから償いとして、各人が二〇頭の牛を返しましょう。そのうえ、あなたに金と銅を和解のために贈りましょう（二二、五四―五九）という申し出をオデュッセウスが拒否しているのも当然だろう。というのも彼が求婚者たちに、「神々をも、人間たちの復讐をも恐れず、わたしが生きているのに館を食いつくし、侍女たちと無理矢理に寝、妻に求婚したのだ（二二、三六―四〇）」と怒って述べているように、求婚者たちの行動の出発点がすでに間違っており、その後の行為も不法なものである故、神々の怒りをかい、彼等がオデュッセウスに皆殺しにされるのも必然的なことなのである。したがってイタカに帰り着いたオデュッセウスに、アテネが、理由を述べずに自明のこととして求婚者たちの殺害を命じているのも、けっして不自然なことではないだろう。

このように見てくれば、エルプセの提起した疑問、すなわちオデュッセウスの求婚者殺害は、不当な大量殺戮ではないかということについても、その大量殺戮はけっして不当なものではなく、そもそも彼等が、自分らの愚かさの故

に最初から違法な行動にでており、しかも神々や予言者の警告を無視して無法な行動を重ねている故、帰国したオデュッセウスに殺害されたのも当然の報いを受けたのだと言えるだろう。この反論は、エルプセが提起した疑問に彼自身が反論したのとは、別の観点からなされた反論である。

つまりオデュッセウスの部下たちが自分らの愚かさ（一、七、一、三四）によって破滅したのとおなじように、求婚者たちも、己れの愚かさ（二四、四五八）によって罰を受けたのである。⁽¹⁹⁾

以上のように見てくると、帰国するギリシア軍の英雄や部下たちにたいする神々の怒りと求婚者たちにたいする神々の怒りは、ともに人間の愚かさ (*asathalia*) にたいしてくだされていることがわかるだろう。それ故、「オデュッセイア」全体の基底には、人間が神の怒りをかい、罰をうけるのは、己の愚かさによるのだという思想が存在していると言える。

したがって愚かさによる神への不敬から災厄をうけるという思想を持つ作者が、「オデュッセイア」を構想したと見做しうるのではないか。

また、オデュッセウスとアテネの関係から推測して、「オデュッセイア」における神と人間の関係は、「イリアス」における神と人間の関係と本質的な相違は見られない故、すくなくともこの点においては、「オデュッセイア」の作者は、「イリアス」の作者と近い関係にあったと見うるだろう。⁽²⁰⁾

だがさきにも述べたところからわかるように「オデュッセイア」は、正邪をきびしくわけ、道徳を重視しているが、「イリアス」では、たしかにパリスがヘレナを奪ってトロイア人たちが不正をおかしているが、それもアプロディテに起因するものであり、神々自体がトロイア方とアカイア方にわかれており、トロイア軍とアカイア軍あるい

は各軍内の将兵の正邪の区別はつけにくく、道徳を重視していないと思われる。それ故、それぞれの作者がたとえ近い関係にあるうとも、この点において、やはり両者の相違が見出だせるのではなからうか。⁽²¹⁾

- 註(1) Hartmut Erbse, *Beiträge zum Verständnis der Odyssee*, Berlin, New York, 1972.
- (2) Erbse, 113-142.
- (3) 以上のオデュッセウスの言葉は、エルプセの要約による。
- (4) 以上のエウリノマコスの申し出の言葉は、エルプセの要約による。
- (5) 以上のオデュッセウスの拒否の言葉は、エルプセの要約による。
- (6) エルプセは、115ff. 及び F. Focke, *Die Odyssee*, Stuttgart, 1943, 278; D. Page, *The Homeric Odyssey*, Oxford, 1955, 42 に反論し、一二三、三七五—四〇三を一一、一一五—一二〇との関連において矛盾のないものと見なしている。
- (7) F. Codino, *Einführung in Homer*, Berlin, 1970, 135.
- (8) Cf. Focke, 42ff.; F. Klingner, *Über die vier ersten Bücher der Odyssee*, Verh. Sachs. Akad. Phil. hist. Kl. 96, 1941, 1, 14 ff.
- (9) Cf. A. Kirchhoff, *Die homerische Odyssee*, Berlin, 1879, 179; E. Bethe, *Homer, Dichtung und Sage II, Odyssee*, Kyklos, Zeitbestimmung, Leipzig, 1922, 12, Anm. 4; Focke, 46, Anm. 1.
- (10) この言葉から、アテネがテレマコスに言っている言葉一五、一六一—一九が、テレマコスを早く帰国させるために、事実をまげて言っているのではなく、求婚者たちが、おそまきながら二歌の集会以後ペネロペイアの実家に求婚しだしていると思われることができる故、アテネは、テレマコスに事実を述べているのだと言えよう。またテレマコスが、自分の財産が消尽されるのを知って怒っていると述べているのは、この時点ではペネロペイアは、まだテレマコスが彼女の再婚にたいする優柔不断な態度を非難している（一二四九—一二五一）と思っているのだと見てよいだろう。 Cf. Focke, II; Wilamowitz, *Heimkehr der Odyssee*, Berlin, 1927, 137.
- (11) 一、三四〇—三四四、二、五〇。

- (12) 二、一一五―一二八、なお前後関係から或る神とは、アテネと推測しうる。
- (13) 一、一六一―一九、二、一六一―一七六。なおⅡ章および一歌の神々の会議（一、四四―九五）参照。
- (14) 二、五五―五八、一九、一五九―一六一。
- (15) アテネの提案は、前後関係から見ても、神々の会議において承認されたと見做してよいだろう。なお本章末尾参照。
- (16) Ⅲ章に引用した二歌におけるアンティノオスの演説参照。
- (17) フォックやクリングナーは、求婚者たちが罰をうけるのは当然であると思っているが、その根拠は、やはり彼等のオデュッセウスの館における無法な行動にあると見ているようである。Cf. Focke, 34ff.; Klingner, 14ff.
- (18) 二四、四五―四六〇参照。
- (19) Cf. K. Rüter, *Odysseeinterpretationen*, Göttingen, 1969, 77ff.
- (20) W. Marg, *Zur Eigenart der Odyssee, Antike und Abendland*, Band XVIII/1, 1973, 2, 4.
- (21) Marg, 13.